

二〇〇七年の回顧「マスコミ」関係書（週刊読書人 07年 12月28日号）

二〇〇六年末に出版された大石裕（編）『ジャーナリズムと権力』（世界思想社）は、①ジャーナリズムと政治エリート・世論との関係、②マス・メディア組織・業界とジャーナリスト、③出来事の名づけとニュースの物語、の三つの視点からジャーナリズム機能を論証している。

その大石の視座を借りると、政治エリート・世論との関係では、樺島郁夫・竹下敏郎・芹川洋一『メディアと政治』（有斐閣アルマ）や奥武則『露探 日露戦争期のメディアと国民意識』（中央公論新社）がある。前者は理論のみでなく、政治ニュースの取材過程や今日的イッシュューをとりあげている。「メディアが

変われば政治も変わる」か。

後者は『二六新報』社長、秋山定輔がロシアのスパイとみなされ失脚していく過程で権力やジャーナリズムが介在し、さらに国民の意識が大きく作用していたことを追求する。時代は経ても、この延長線上にあるネット社会を描く遠藤薫『間メディア社会と（世論）形成』（東京電機大学出版会）や、国家を担う霞ヶ関族とメディアの攻防に狙いを定めた魚住昭『官僚とメディア』（角川新書）であろう。

次のマス・メディア組織・業界とジャーナリストであれば、嶺隆『新聞人群像』（中央公論新社）は草創期における操觚者（そうこしや）文筆業・記者・ジャーナリスト）を、また朝日の伝説人（政治家？）緒方竹虎を中心に、新聞資本と経営を詳述した今西光男『新聞 資本と経営の昭

和史』（朝日新聞社 83）は戦前の新聞組織から言論の行方を探っている。加えて『兵は凶器なり』『言論死して国ついに滅ぶ』の著書がある前坂俊之『太平洋戦争と新聞』（講談社学術文庫 181）を読むと、戦争への道を取り始める国家とジャーナリズム、言論の危うさを教えてくれる。半世紀後、IT時代と真つ向から向き合わねばならない新聞界は新しいビジネスモデルの構築に迫られ、河内孝『新聞社』（新潮新書 205）に変貌する様は興味深い。

テレビ・メディアに視点を移すと、敏腕プロデューサーとして名を馳せた大山勝美『私説放送史』（講談社）や北村充史『テレビは日本人を「バカ」にしたか？ 大宅壮一と「一億総白痴化の時代』（平凡社新書 362）のように、齢（よわい）五十年を超えたテ

レビ史を描き、テレビが創り出す文化へ警鐘を鳴らす。あるいは藤平芳紀『視聴率の正しい使い方』（朝日新書 042）などもおもしろい。

しかし、メディアが不祥事を起こすと、何でも視聴率（発行人部数）のためにと非難されがちである風潮と、だからこそメディアリテラシーが必要という声にはいささか辟易するところもある。

大石の視座の三つ目に入ると思うが、現在のジャーナリズム状況を考えさせる金平茂紀『テレビニュースは終わらない』（集英社新書 0400B）が言うように、（実は）「最も必要なのは、実際にメディアに関わっている人間たちの意識改革」や、「メディアは誰のものなのか」（魚住）への問い、あるいは放送ばかり言われる公共性はマス・メディアに共通する基本機能では

ないか、という点について啓蒙する書がより出版されることを願う。その意味でロンドン大学教授、ジェームズ・カラン『メディアと権力』（渡辺武達監訳、論創社）をあげておく。同書は英国メディア中心だが、歴史学・社会学・政治学の側面からメディア研究、社会的影響を論じている。

また小林直毅（編）『「水俣」の言説と表象』（藤原書店）は、ジャーナリズムをとおして社会に表象されるもの、されないものそして何が表象不可能にしたのか、新聞、映像メディアから研究者が多角的に検証している。

ニュース感覚という意味では、金森トシエ『笑って泣いて書いた』（ドメス出版）やチェチェン事件に絡んで暗殺されたと言われているアンナ・ポリトコフスカヤの『ロシアン・ダイアリー―暗殺

された女性記者の取材手帳』

（日本放送出版協会）、イラク戦争で数少ない現地取材をした佐藤和孝『戦場でメシを食う』（新潮社）などを読みたい。

最後に、創立六十年を迎えた日本大学法学部新聞学科の教員が意欲的に編んだ『メディアの変貌と未来』（八千代出版）や調査研究を分かりやすく説いた、島崎哲彦・坂巻義生編著『マス・コミュニケーション調査の手法と実際』（学文社）をあげる。現代マスコミの成立と多様な拡張を理解するためには手頃な書であろう。

鈴木雄雅（すずき・ゆうが）
上智大学文学部教授・新聞学専

番外編

佐藤卓己・孫安石（編）『東アジアの終戦記念日』（筑摩新書669）

橋場義之・佐々木俊尚・藤代裕之『メディア・イノベーションの衝撃』（日本評論社）
青池慎一『イノベーション普及課程論』（慶応義塾大学出版会）